香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 15

―平成13年度―

2002

香芝市教育委員会

序　　文

香芝市は奈良県の北西部、「万葉集」にもうたわれた二上山の麓に位置しています。

大阪に隣接する地理的条件に加え交通網が発達していることから近年、大阪のベッドタウンとして開発が進み、現在人口も64,000人をこえ、今なお増加の一途をたどっています。

その反面、古くから自然環境に恵まれ、現在まで受け継がれてきた有形文化財など、数多くの文化財が残されています。

なかでも、二上山からサヌカイトが産出することから、その北麓には旧石器時代の遺跡が多く分布し、また、平野部の狐井遺跡などのように各地の土器が出土する遺跡もみつかっています。当時、サヌカイトを求めて人々が集まってきたのでしょう。

また、日本最大の塔心礎から耳環などの舎利荘厳具がみつかり、今年、国の史跡に指定された尼寺廃寺跡など全国的に知られた遺跡もあります。

このたび、平成13年度の国庫補助金事業として実施しました尼寺廃寺南遺跡などの調査結果をとりまとめ、その発掘調査概要報告書を刊行することとなりました。

この発掘調査を実施するにあたり、ご協力を賜りました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆さま方に深く感謝申し上げますとともに、この概要報告書が多くの方々の目にふれ、本市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただきましたら幸甚に存じます。

平成14年３月

香芝市教育委員会

教育長　山　田　勝　治

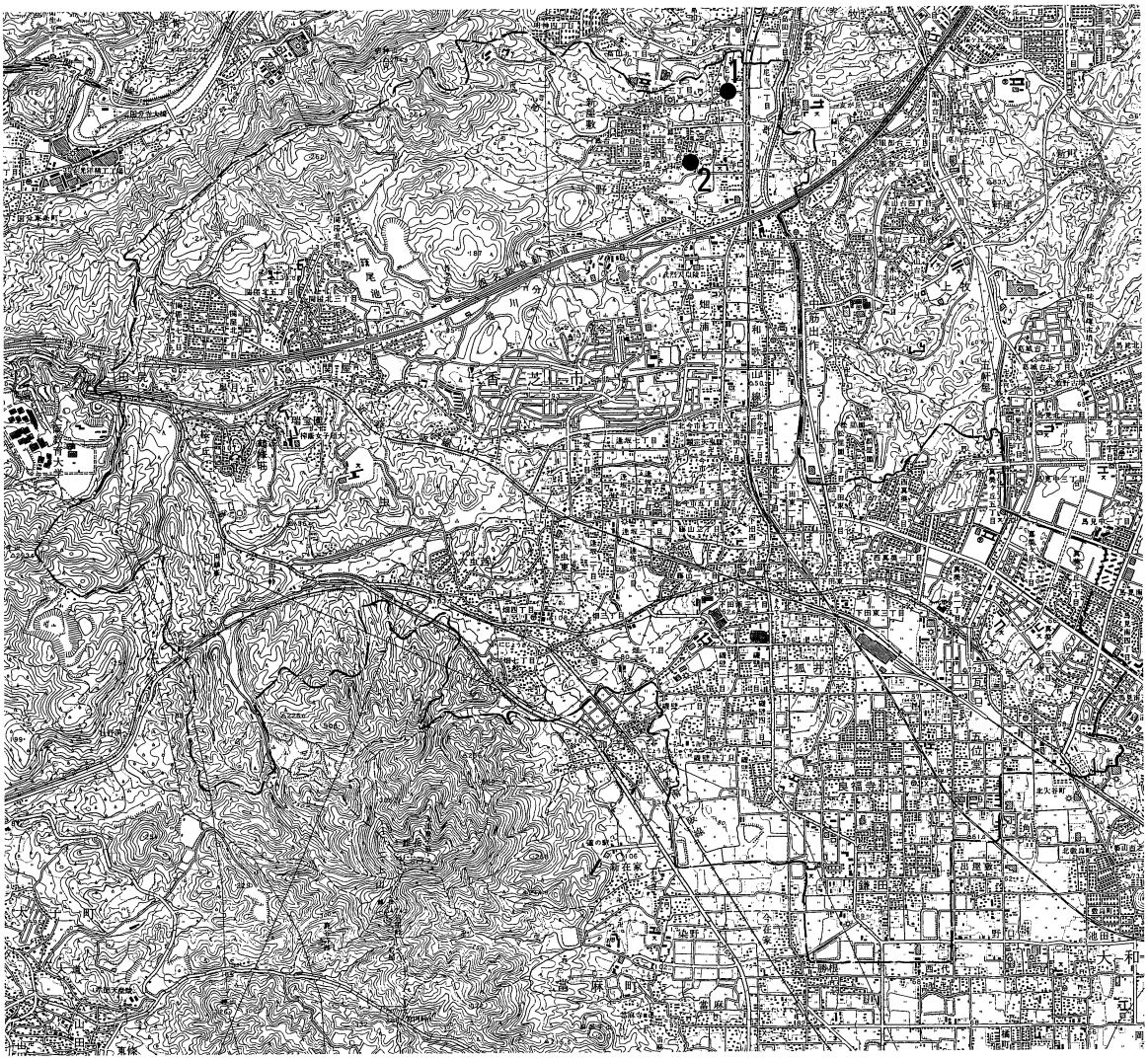
例　　言

1．本書は、香芝市教育委員会が平成13年度の国庫補助金事業（事業名：市内遺跡発掘調査）として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査は香芝市が事業主体となり、香芝市教育委員会事務局生涯学習課二上山博物館が実施した。
3．発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録、および出土遺物は香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山１丁目17番17号）で保管している。
4．現地調査および、出土遺物については下記の方々からご教示を賜りました。記して深く感謝致します。（五十音順。敬称略）

泉森　皎・大野玄妙・大脇　潔・塚口義信・中井　公・西川雄大・花谷　浩・森　郁夫・毛利光俊彦

目　　次

調査位置図 …… 1
尼寺廃寺南遺跡（尼寺廃寺第17次調査） …… 2
Ⅰ　はじめに …… 2
Ⅱ　遺跡の環境と概要 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 5
1　調査の経過と検出遺構 …… 5
（1）Aトレンチ …… 6
（2）Bトレンチ …… 8
（3）Cトレンチ …… 8
（4）C－3トレンチ …… 11
2　おもな出土遺物 …… 12
（1）Aトレンチ …… 12
（2）Cトレンチ …… 13
Ⅳ　まとめ …… 15
（1）第17次調査からみた南廃寺の概要 …… 15
（2）南廃寺と北廃寺の関係、寺院名 …… 15
（3）斑鳩寺213型式B種の軒平瓦について …… 17
平野１号墳 …… 19
Ⅰ　位置と環境 …… 19
Ⅱ　調査の経過 …… 20
付　載
第15次調査出土の軒丸瓦 …… 25



第１図　平成13年度国庫補助金事業に伴う調査位置図（Ｓ＝１／50,000　上が北）

平成13年度国庫補助金事業に伴う調査一覧

No.	遺　跡　名	調査次数	調　査　地　番	調　査　期　間	調査面積
1	尼寺廃寺南遺跡	第17次	尼寺２丁目174－３，175－１，198－１，－２，265－１	平成13年５月15日～同年11月30日	645㎡
2	平野１号墳	第１次	平野1043番地	平成13年８月22日～同年11月30日	―

尼寺廃寺南遺跡（尼寺廃寺第17次調査）

Ⅰ　はじめに

香芝市では近年、大阪のベッドタウンとして急速に開発が進み、それとともに埋蔵文化財の発掘届出件数も急増している。発掘調査は随時実施しているが小規模なものが多く、ほとんど遺跡の範囲や性格などをとらえることができないまま開発が行われているのが現状である。中には遺跡全体としてとらえれば貴重なものもあるだろうが、範囲確認調査が追いつかず、開発の方が速く進んでいるのが実状である。

そこで、遺跡の範囲や実態を把握し、今後の開発行為に対応するためのデータ収集と自己用住宅の建築に対処するため、昭和56年度以降、毎年国庫補助金事業を継続的に実施している。昭和56年度から平成２年度までは、旧石器時代を中心とする二上山北麓遺跡群を中心に調査を実施した。続いて、平成３年度から平成９年度にかけて、開発によって景観がかわりつつある尼寺廃寺の範囲確認調査を行い、北廃寺が東向きの法隆寺式伽藍配置であったことや寺域がほぼ解明された。そして、平成11・12年度には平野２号墳の確認調査を行い、これまで不明であった墳丘の南斜面に開口する横穴式石室を検出した。この石室の構造については側壁が花崗岩の巨石を縦方向に使って構築され、玄室床面には棺を置いたと推定される土などで固められた部分の周囲に凝灰岩の切石を敷き詰め、さらに、棺を受ける台と考えられる浅い容器状の破片も出土するなど、この時期の古墳の変遷を考える上で多大な成果があった。なおこの間、平成12年度には伽藍配置がほぼ確定した尼寺廃寺（北廃寺）の中門推定地で自己用住宅の建て替えが計画され、その事前発掘調査で推定通りの位置で中門を検出した。これによってようやく北廃寺の伽藍配置が確定し、平成13年７月に史跡指定申請書を提出した。そして、同年10月19日に開かれた文化審議会で答申され、平成14年３月19日に告示された。

Ⅱ　遺跡の環境と概要

尼寺廃寺の東には葛下川が北流しており、古代においては葛下川の西は葛下郡、東は広瀬郡とよばれていた。６世紀後半から７世紀代のおもな遺跡では、葛下郡には尼寺廃寺のほか平野窯跡群、平野古墳群、片岡王寺(放光寺）など、広瀬郡には牧野古墳や寺戸廃寺、長林寺などがある。

このうち尼寺廃寺周辺の遺跡をみると、まず、平野窯跡群は尼寺廃寺の南約200m、尼寺川が流れる浅い谷を隔てた小高い独立した丘陵の北斜面に須恵器窯（４号窯）と瓦窯（５号窯）が各１基ずつ存在し、この丘陵から南へ約80m隔てた西からのびる丘陵の北斜面に３基の須恵器窯（１～３号窯）があり、これら５基を総称して平野窯跡群とよばれている。なお、この窯跡群は奈良盆地内で初めて築かれた須恵器窯である。窯はすべて登窯で、１・４・５号窯が発掘調査された。出土した遺物から須恵器窯は６世紀末から７世紀初頭頃の操業と考えられている。また、瓦窯は途中で大幅な改造が加えられており、１次窯、２次窯と区別されている。いずれも軒瓦が出土しなかったため供給先等は不明である（千賀1983)。しかし、距離的に尼寺廃寺に供給された可能性が高いと考えられ、１次窯から出土した瓦の特徴は南廃寺で出土した瓦に、２次窯から

出土した瓦の特徴は北廃寺の金堂から焼け落ちた状態で出土した瓦に多くみられる。

平野古墳群は平野窯跡群のうち３基の須恵器窯（１～３号窯）が存在するのと同じ丘陵の南斜面に築かれている。本来６基あったと考えられるが、現在は３基しか残っていない。東から平野１号墳・２号墳、消滅した４・３号墳、そして、もっとも西に位置するのが平野塚穴山古墳である。さらに、塚穴山古墳の南に地元で「七ツ石」とよばれている花崗岩の巨石が数個点在しており、地元に残る江戸時代の絵図に「岩屋」とあることから、この古墳の石室が破壊された石材であろうと考えられている。まず、１号墳は南に花崗岩の巨石で構築された横穴式石室が開口しており、７世紀初頭の築造と考えられている（泉森1984）。２号墳は発掘調査の結果、南に開口する横穴式石室が検出され、側壁が花崗岩の巨石を縦方向に使って構築されていることから１号墳より後出と考えられている。また、玄室床面に凝灰岩の切石を敷き詰めた特殊な構造であったことも判明している（香芝市教育委員会編2001）。３号墳は1962年頃からの土取り等で破壊されたが、この古墳に用いられたと考えられる凝灰岩の切石が10石以上確認されており、主体部はこれらで構築された横口式石槨であったと考えられている（泉森1984）。４号墳は花崗岩の切石が１個確認されたのみで、詳細は不明である。塚穴山古墳は凝灰岩の切石で構築された横口式石槨が南に開口し、終末期古墳としては異例の大きさである。石槨床面には19個の切石が敷き詰められており、百済の扶余陵山里古墳群の影響が考えられている（泉森1984）。この平野古墳群は、地元に残る江戸時代の絵図で塚穴山古墳は顕宗天皇陵に、消滅した３・４号墳は武烈天皇陵に治定され、さらに、１・２号墳は御廟所とされていることから王族の墳墓であった可能性が考えられる。そして、塚穴山古墳は７世紀後半の築造とされ、被葬者は敏達天皇の孫で舒明天皇の異母兄弟でもある茅渟王とする説がある（塚口1991）。

この平野窯跡群と平野古墳群は同じ丘陵の北斜面と南斜面に築かれており、窯の操業と古墳の築造には何らかの関係が考えられ、窯で焼成された瓦が尼寺廃寺に供給された可能性が高いことから、尼寺廃寺を含めてこれらの関係を考えていく必要があろう。なお、尼寺廃寺に瓦を供給したと考えられる窯としては、尼寺の集落西方の丘陵上に立地する厨神社の境内にもある。この窯跡は鳥居を入ったすぐ右手の削られた崖面に、登窯の焼成部と考えられる部分の断面が露出している。今後の調査が待される。

その他、周辺の寺院跡として尼寺廃寺の北約２㎞に片岡王寺（放光寺）がある。７世紀前半に敏達天皇の第三皇女の片岡姫が片岡寺と称したことに始まるとされている。四天王寺式の伽藍配置であったと考えられているが、現在は伽藍の上に小学校が建設されており詳細は不明である。

さて、尼寺廃寺であるが、尼寺廃寺は香芝市の北端、王寺町との境界付近に位置する。古くから尼寺の集落内で布目や縄目のついた古代の瓦や蓮華紋軒丸瓦、唐草紋軒平瓦などの軒瓦が数多く出土し、さらには礎石が残る基壇も２ヶ所に存在することから古代寺院跡の存在が考えられてきた（保井1932）。丸瓦や平瓦は今もいたるところで散見できるが、おもに基壇を中心に分布している。しかし、この２つの基壇は南北約200m隔てて存在しており、また、両者のほぼ中央付近に谷が存在し、谷部分では瓦がほとんど出土しないことなどから、南北２つに分かれる寺院跡（南廃寺、北廃寺）と考えられてきた。

平成６年度において、民間の開発事業にともなって中央の谷部分を２ヶ所調査した。そのうち、北廃寺の伽藍推定地のすぐ南側で実施した第５次調査では、表土直下で地山が検出され遺構や遺

物はまったく検出されなかった（香芝市教育委員会編1995ｂ）。そして、その南側で実施した第６次調査では、トレンチ南端で幅10m以上になると推定される川跡を検出し、南北２つに分かれる寺院跡であることが確実となった（香芝市教育委員会編1995ｂ）。

範囲確認調査は平成３年度から９年度まで国庫補助金事業によって継続して実施した。

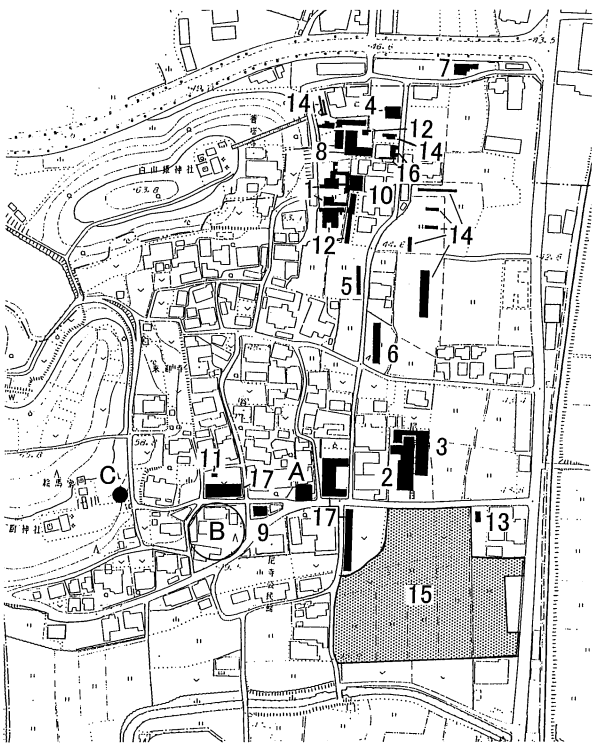
まず、北廃寺は平成３年度に礎石が残る基壇の西側を調査し、基壇の西端と西面回廊を検出した（第１次調査）。しかし、この調査では基壇から回廊方向に設定されたトレンチにおいて焼け落ちた瓦が大量に出土したが、その瓦が回廊と基壇のいずれに伴うのか区別せず一括で取り上げられたり、また、回廊の縁石が検出されたにもかかわらず、その縁石を中世の石組みと誤認したり、さらには回廊の幅や柱間、基壇の南北長などの数値も現場で正確に実測されなかったなど、後の調査で解明しなければならない多くの課題を残した調査となった（香芝市教育委員会編1992）。

結果として、後の調査で確定した金堂と回廊の所用瓦ではない瓦ということで、坂田寺式軒丸瓦を塔所用瓦としているのが現状である。

平成６年度の調査では金堂西側の雨落ちを検出した（第８次調査）。この雨落ちの状況から金堂が南北棟であった可能性が高いこと、そして、南に存在する基壇が塔跡と推定されることなどから、東向きの法隆寺式伽藍配置を想定するにいたった（香芝市教育委員会編1995ａ）。

そこで、平成７年度では伽藍の中軸線を決定し、より正確な伽藍配置を復元するため塔跡と推定されていた基壇を調査した（第10次調査）。その結果、従来からの推定通り塔跡であることを確認するとともに、心礎が現存するものとしては日本最大（約3.8m四方）で、その柱座から耳環12点や水晶玉４点、ガラス玉３点などの舎利荘厳具が出土し、さらに、塔基壇構築法が確認されるなど多大な成果があった（香芝市教育委員会編1996）。この第10次調査の結果、北廃寺の創建が飛鳥時代にさかのぼる可能性が高いことや伽藍配置が四天王寺式の可能性が指摘された。

平成８年度は伽藍配置が四天王寺式と法隆寺式のどちらであったかを確認するため、四天王寺式であれば塔跡の南側で中門にあたる部分と、回廊の南西角と推定される部分を中心に調査した。さらに、金堂北東部分についても調査した（第12次調査）。その結果、回廊南西角から続く南面回廊内側のラインが、塔跡南側で検出した雨落ちと直線的に続いていることから、この塔跡南側の雨落ちが南面回廊に伴うものであり、中門が存在しないことが判明した。また、金堂北東角については第８次調査で検出した溝が続いていたため検出できなかったが、推定通りの位置で北側雨落ちが検出されたことから金堂が南北棟であ



第２図　調査位置図（Ｓ＝１／5,000　上が北）
＊数字は調査次数を示す
Ａ.薬師堂　Ｂ.般若院　Ｃ.尼寺窯

ったことが確実となった。これにより、南面回廊に中門がとりつかないこと、金堂が南北棟で地形的に西側に丘陵が迫っていることなどから東が正面と考えられ、従来の推定通り東向きの法隆寺式伽藍配置であったことがほぼ確認された（香芝市教育委員会編1997）。

そして、平成９年度では回廊北西角と東面回廊推定地、さらに、地割りから築地等の施設が考えられる部分を南面と東面で調査した（第14次調査）。その結果、ほぼ推定通りの位置で回廊北西角を検出した。そして、東面回廊も検出したが、東面回廊は推定よりも東よりで検出され、東面回廊と塔、金堂の間隔が西面回廊側より広くとられていることが判明した。このことは、中門を入った前面を意識的に広くとったと考えられ、伽藍配置が東向きであった傍証となった。また、東面と南面の寺域を限る施設の痕跡も検出し、さらに、回廊北西角の北側で鉱滓（鉄滓、銅滓）やふいごの羽口、鴟尾の破片が出土し、大量の瓦が焼け落ちた状態で北方に連なっている状況も確認した。このことから、鍛冶工房の存在、および、回廊北側に講堂があった可能性が高まった。そして、これまでの調査で出土した瓦などから、北廃寺は飛鳥時代から白鳳時代にかけて創建された寺院跡であり、中門と講堂以外の伽藍配置が確認された（香芝市教育委員会編1998）。

平成10年３月末で終了した第14次調査でほぼ伽藍配置と寺域が確定したが、平成12年度になって中門推定地で自己用住宅の建て替えが計画された。しかし、業者が発掘届出書を提出せず基礎工事を先行させたため、基礎部分以外の場所でしか調査できない状況にあった。しかし、伽藍復元図から東面回廊外側、および推定される中門の北東角部分において調査可能であった。調査の結果、推定通りの位置で東面回廊外側を検出し、中門の北東角部分については撹乱によって平面では確認できなかったが、トレンチ断面の土層により中門基壇を構築する版築土を確認した（第16次調査）。これにより中門が東面回廊にとりつき、中門の幅が約9.5mであることが判明し、東向きの法隆寺式伽藍配置が確定した（香芝市教育委員会編2001ａ）。

一方、南廃寺は役行者をまつる薬師堂に礎石がいくつか残っており、その西約50mにある般若院境内でかつて多くの軒丸瓦や軒平瓦が出土したことから、伽藍がこの周辺に存在したと推定されている（香芝町史調査委員会編1976）。般若院境内で出土した軒瓦の多くは７世紀中頃のもので、現在の本堂の北東雨落ちから焼け落ちた状態で出土している。また、今も境内全域に瓦が散乱しており、礎石もいくつか残っていることから何らかの堂宇があったと推測される。ただ、これまで伽藍推定地においては自己用住宅の建築等で数次の調査を実施したが、調査面積が狭いことなどから伽藍に関係する遺構は検出されていない。したがって、遺跡地図では尼寺廃寺南遺跡としている（香芝市教育委員会編2001ｂ）。

しかし、伽藍推定地の東から南東部分においては民間の開発事業に伴う調査等で多数の掘立柱建物跡や井戸などが検出され、南廃寺の造営集団、あるいは寺院に関連する集団の建物群の可能性が想定されている（香芝市教育委員会編1994ａ・ｂ、香芝市教育委員会編2000）。

Ⅲ　調査の概要

１　調査の経過と検出遺構

今回の調査は国庫補助金事業による範囲確認調査として実施した。まったく不明な伽藍の一部を検出して伽藍復元の手がかりとし、すでに伽藍配置が確定している北廃寺との関係を解明することが最大の目的である。とりわけ、これまで南廃寺から出土いている軒瓦は少ないが、北廃寺

とほぼ同じであることから同時に南北２つの伽藍が存在したと推定されるにとどまっている。したがって、今回の調査でどちらが早く造営されたかという時期的な前後関係の解明が期待されるところである。

北廃寺は東向きの法隆寺式伽藍配置であったことを確認しているが、南廃寺は伽藍の中心と推定される部分にすでに家屋が密集しているため調査できず、まったく不明な状況にある。しかし、地割りから回廊の存在が考えられる位置で畑地として残っている部分がいくつかあることから、そこを中心に調査することにした。

（１）Ａトレンチ（第３図）

まず、般若院の北側でトレンチを設定した。最終的には当初設定したトレンチの排土部分についても掘削し、東西25m、南北８m、調査面積は200㎡となった。般若院ではかつて現本堂の北東雨落ちから多くの軒瓦が出土しており、もし、この本堂が当時の基壇を修築して建てられているとすれば、この調査区で南北方向の回廊が検出される可能性があった。この調査区は東半分が西側より一段低くなっており、人頭大の石を積んで約20㎝の段差を設けている。

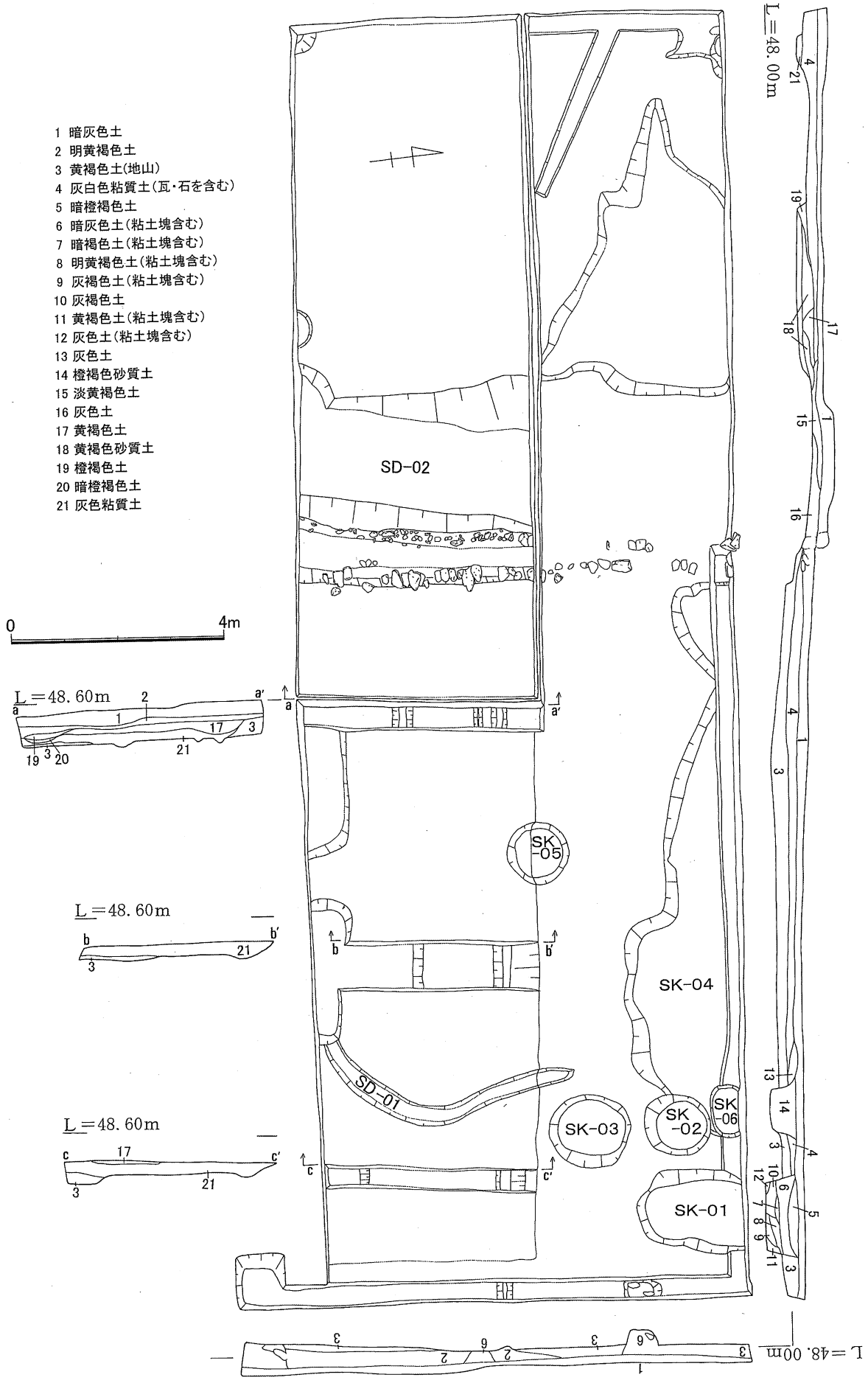
このトレンチでは現地表面から約0.3mで地山となり、土坑６基、ピット１基、溝１条などを検出した。

まず、一段低い東側で検出した遺構について、土坑は直径約1.0m～1.4m、深さ0.2m～0.3mのものが４基（ＳＫ-02、03、05、06）あり、東西約1.6m、南北2.0m以上、深さ約0.6mのもの１基（ＳＫ-01）、東西約10.5m、南北2.3m以上、深さ約0.1mのものが１基（ＳＫ-04）である。このうち、ＳＫ-01とＳＫ-04の埋土からは瓦片のほか近世の陶磁器片が出土した。他の土坑については瓦片が数点出土、または皆無であった。ＳＫ-06については埋土から明らかに現代に掘られた土坑である。ピットは東西0.4m以上、南北約0.7m、深さ約0.5mで遺物は出土しなかった。溝（ＳＤ-01）は南から北に向かって約3.5m蛇行しながらのびている。埋土は炭混じりの粘質土で近世以降に掘られたものであろう。

なお、南側で東西約11.5m、南北3m以上にわたって地山を掘り込んだ遺構を検出した。しかし、排土の置き場がなかったため３ヶ所で断ち割りをするにとどめた。その結果、この地山を掘り込んだ遺構は深さ約0.3m～0.7mで、北側に深さ約0.1mの溝が東西に走っていた。遺物は皆無であった。この遺構の性格については不明である。

次に、一段高い西側については段を構築する石の部分から西へ幅約3.5m～4m、深さ約1mの溝（ＳＤ-02）が南北に掘られており、この埋土から瓦片や陶磁器片のほか昭和40年代の10円硬貨が１枚出土した。この溝は平成８年度に実施した第11次調査で溝状遺構と報告されたものに続くと考えられ（香芝市教育委員会1997）、遺物から寺院と無関係なことから北側部分については掘削しなかった。

この般若院北側のＡトレンチについては全面にわたって削平と撹乱を受けており、尼寺廃寺創建時の整地土等はまったく確認できなかった。また、検出した遺構の時期については、遺構の多くに近世以降の遺物が含まれていることから、ほとんどがその時期のものであろう。確実に尼寺廃寺創建時期と断定できる遺構はない。ただし、トレンチ南側で検出した地山を掘り込んだ遺構がその可能性として残るが、遺物が皆無であったため断定できなかった。今後の課題である。



第3図　Aトレンチ平面図・北、東壁断面図

（2）Bトレンチ（第４図）

現存する基壇から東へ約30m、南北に走る里道が東西に走る里道と交差する地点の南側にトレンチを設定した。南北40m、東西4m、調査面積は160㎡である。

この南北に走る里道は、現存する基壇が回廊に囲まれていたとすれば東面回廊の位置にあたると推定され、調査区の北側を東西に走る里道は東向きの伽藍配置とすれば、中門に向かう参道と推定される。もし、推定通りであればトレンチ全面で東面回廊、北側では中門の一部、そして、南側では東面回廊から南面回廊へ続く回廊南東角が検出される可能性があった場所である。

しかし、表土を除去するとトレンチ北側では現地表面から約0.3m、南側では約0.5mで地山となり、素掘り溝数条と小規模なピット８基が検出されたにとどまった。層序は第１層が暗灰色土（現代耕作土）、第２層が橙褐色土（床土）、第３層が明褐色土の地山である。また、このトレンチから出土した遺物は瓦片と須恵器片など十数点で遺物箱１箱にも満たず、もしかつて遺構があったとしても完全に削平され、東側へ遺物ともども土が運ばれたと考えられる。

検出したピットは直径約0.3m～0.5m、深さ約0.1mのものが５基、直径0.1m～0.16mで柱痕が残るピットが３基で、そのうち最も深い柱痕は深さ約0.4mである。これらの遺構の時期については、埋土に遺物が包含していなかったかため確定できないが、おそらく中世～近世と考えられ、寺院に関連する遺構でないことは確かであろう。

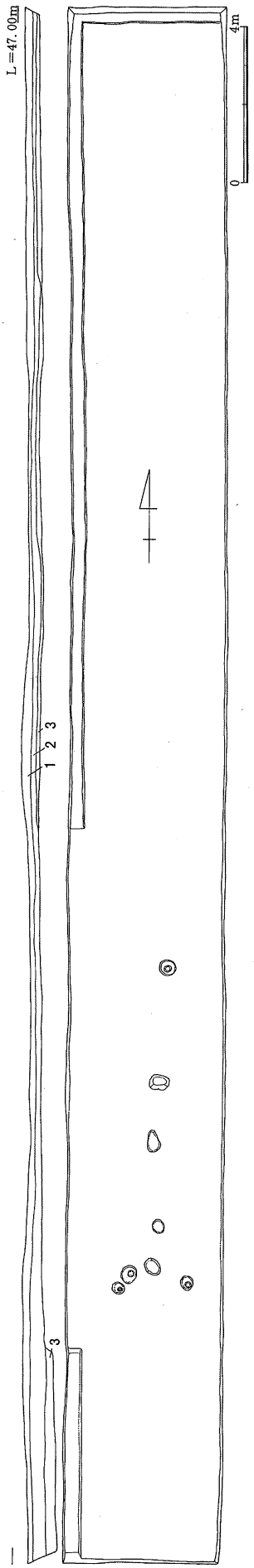
（3）Cトレンチ（第５図）

現存する基壇の東側の畑地のやや北寄りで南北４m、東西17mのトレンチ（C-１トレンチ）を、南側で南北４m、東西15mのトレンチ（C-２トレンチ）を設定し、遺構の検出状況によってこの２つを結ぶ南北方向のトレンチ（Cトレンチ拡張区）を設定することにした。最終的に南北18m、東西８mの拡張区を西側で設定した。そして、最後にC-１トレンチの西で南北13m、東西１mのトレンチ（C-３トレンチ）を設定した。調査面積は285㎡である。

C-１、C-２トレンチはBトレンチで東面回廊等の遺構が検出されなかったため、基壇に近い部分に回廊があるかどうか、また、寺院造営に伴う整地土の広がり等を確認するため設定した。

まず、C-１トレンチは平均すると現地表面から約0.5mで地山となり、素掘り溝数条と土坑２基、ピット５基を検出した。

土坑について、中央から東側で検出したＳK-02は南北４m以上、東西８m以上、深さ約1.3mの大規模かつ不整形なもので、トレンチの外側へかなり広がっている。中央付近で検出したＳK-03は南北1.4



第４図　Bトレンチ平面図・西壁断面図

m以上、東西約1.8m、深さ約0.6mである。いずれの土坑も近世の瓦片多数と陶磁器片等に混じって古代の瓦片が出土した。

ピットはおもにトレンチ西側で検出した。直径約1.2m～1.0mのもの２基（P-01、02）が埋土の状況から古く、間隔が約4.3mであることから高麗尺であれば12尺に相当する。残り３基（P-03、04、05）は直径約0.4m～0.5mで、P-05はSK-03の埋土に掘られており近世以降である。P-03とP-04は埋土の状況とこれまでの周辺地域の調査から、古くとも平安時代以降と考えられ、間隔が約2.7mであることから唐尺の９尺に相当する。ピットはいずれも深さ約0.15m～0.2mで、これらが東へ続くかどうかは近世の土坑によって確認できず、西へ続くかどうかも不明である。

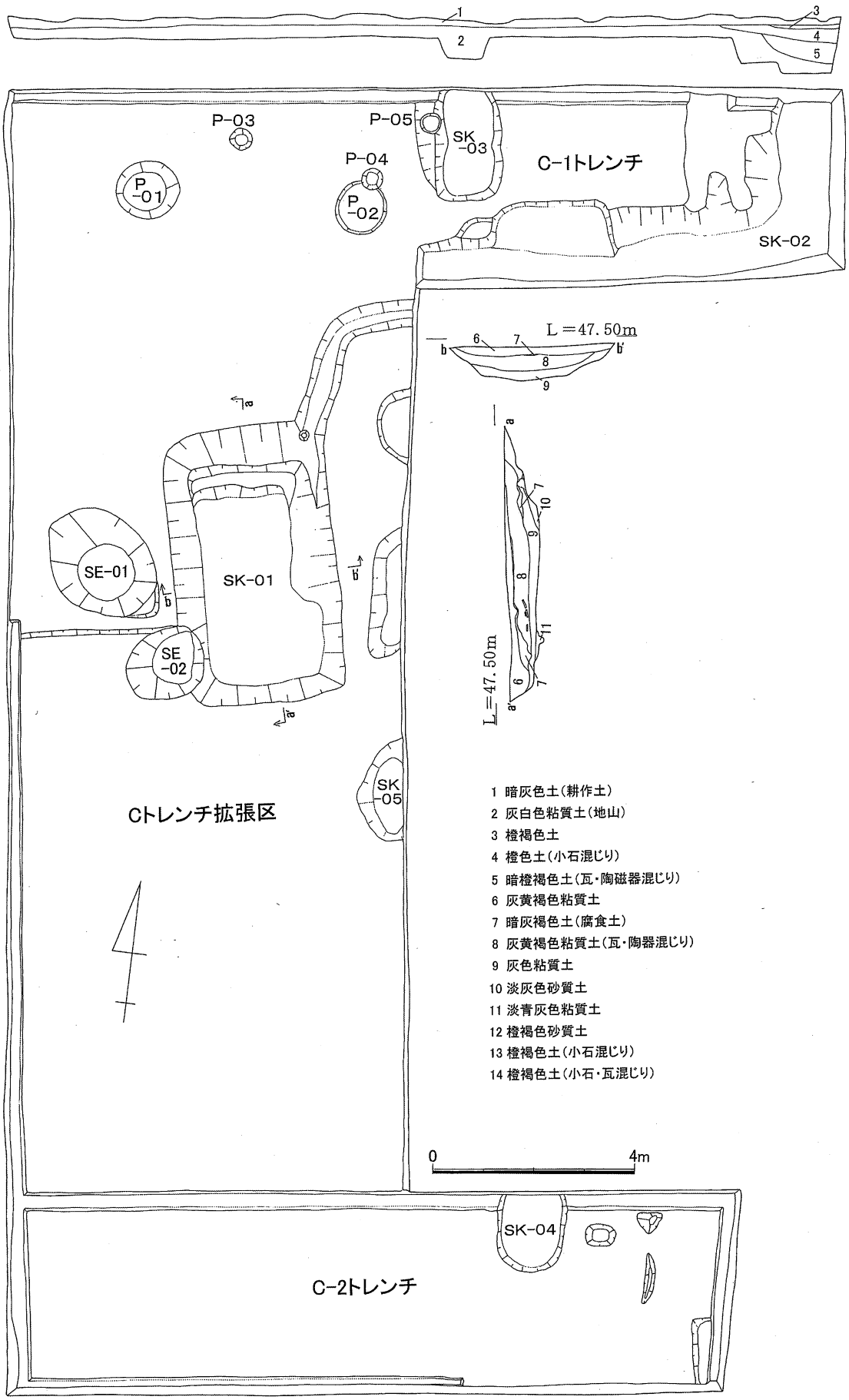
C-２トレンチは現地表面から約0.3m～0.4mで地山となり、南北方向の素掘り溝数条と東側で東西約1.3m、南北1.6m以上、深さ約0.8mの土坑（SK-04）とピット数基を検出した。土坑からは奈良時代中頃の軒平瓦片（6717型式Ｂ種、以下6717Ｂと略す）をはじめとする瓦片と須恵器片などが出土した。なお、この土坑の東側で検出したピットはC-１トレンチで検出したSK-02（このトレンチでは排土の関係で掘削せず）の続きと考えられる埋土に掘られており、時期は近世以降と考えられる。なお、遺構に伴わないが、表土直下の近世と考えられる整地土から軒平瓦の細片（6717Ｂ）が１点出土した。

次に、C-１、およびC-２トレンチを掘削した結果、東側が大規模なSK-02によって遺構の存在が期待できないこと、また、C-１トレンチの西側で数基のピットが検出されたことから、この続きを確認するため西側で２つのトレンチを結ぶ幅８mの拡張区を南北方向に設定することにした（Cトレンチ拡張区）。

この拡張区では新たに土坑４基と井戸２基、溝１条を検出した。なお、C-１トレンチで検出したSK-02の続きは大量の排土が予想されたため掘削しなかった。

まず土坑と溝について、SK-01はSE-02を切って掘削されており、南北約5.5m、東西約3.2m、深さ約0.7mのほぼ長方形で、南側の底で南北約0.6m、東西約0.9m、深さ約0.15mの落ち込みがある。そして、北東角から幅約0.6m、深さ約0.15mの溝が北東から東の方向にのびている。この土坑からは飛鳥時代から奈良時代と江戸時代の瓦片多数、そして、江戸時代の陶磁器片多数が出土した。なお、瓦片の中に斑鳩寺の創建瓦の１つである斑鳩寺213型式Ｂ種（以下、斑鳩寺213Ｂと略す）の軒平瓦片が１点含まれていた。これまで北廃寺を含めた尼寺廃寺の調査において、斑鳩寺、および法隆寺西院伽藍の創建瓦は出土したことがなく今回が初めてである。SK-05は東側中央付近の壁面にかけて検出した。検出した面はSK-01とSE-01が掘削された当時の整地土の下である。この土坑は井戸の可能性が高いが、半分以上がトレンチの外側へ続いており、深く掘削することが困難であったため確認できなかった。したがって、ここでは土坑として報告する。この土坑からは飛鳥時代から奈良時代の軒丸瓦４点をはじめとする多数の瓦片のほか須恵器片、陶磁器片等が出土した。なお、この土坑から出土した陶磁器片がSE-02から出土したものと接合することから、SE-02と同じ時期に埋められた可能性が高い。

井戸について、SE-01はSK-01の西約0.7m（掘り方はSK-01の西約0.3m）の位置にありSK-01にほぼ接している。直径約1.1m（上面では直径約2.0m）で、約4.6mの深さまで掘削したが底は検出できなかった。この井戸は素掘りで、しかも壁面が湧き水のため崩落する危険性が



第５図　Ｃトレンチ平面図・北壁断面図・ＳＫ-01断面図

あり、さらに、掘り下げた面から底まではまだ１m以上もあることから、安全のためこれ以上は掘削しなかった。遺物は上層で古代の瓦片や江戸時代の陶磁器片が多数出土したが、上面から約２m以下ではまったく出土しなかった。出土遺物からＳＫ-01とほぼ同じ時期に廃絶したと考えられる。

ＳＥ-02はＳＫ-05と同じくＳＫ-01とＳＥ-01が掘削された当時の整地土の下から検出した。直径約1.0m～0.8m（上面では直径約1.4m～1.6m）、深さ約2.6mの不整形な井戸である。遺物は古代の瓦片多数と須恵器片、黒色土器片のほか陶磁器片が少量出土した。この深さでは湧き水が少なく、井戸としてはあまり機能していなかったと考えられる。また、不整形に掘られていることから、何らかの理由で掘削が中断された可能性もある。

このＳＫ-01、ＳＫ-05、ＳＥ-01、ＳＥ-02の関係については、ＳＫ-05とＳＥ-02が埋められて整地されたあとＳＫ-01とＳＥ-01が掘削され、最終的に江戸時代に廃絶している。なお、ＳＫ-01とＳＥ-01の前後関係、また、ＳＫ-05とＳＥ-02の前後関係については不明である。

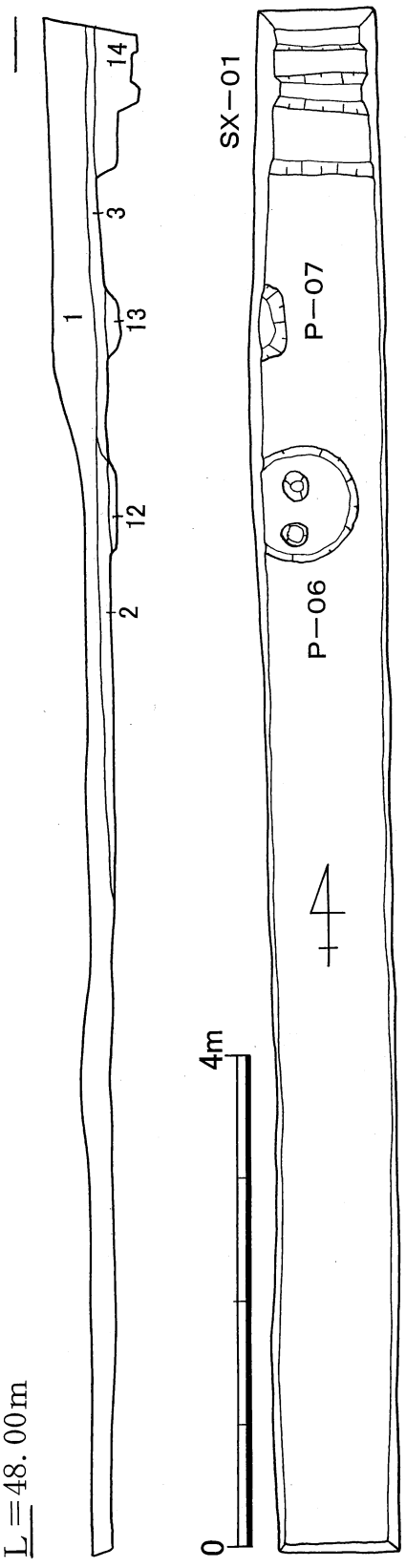
その他、ＳＫ-05の北側で検出した２基の土坑については、Ｃ-１トレンチで検出したＳＫ-02の埋土に掘られており、遺物は出土しなかった。

（４）Ｃ-３トレンチ（第６図）

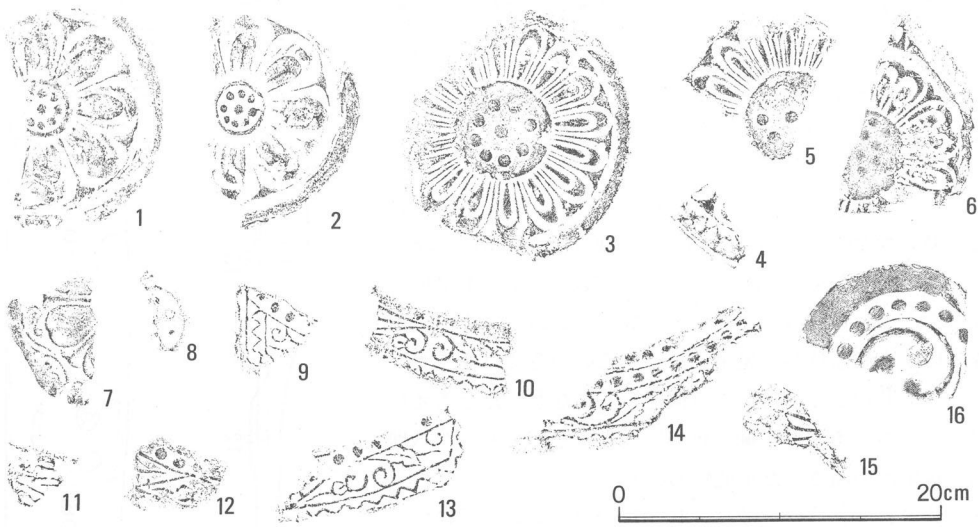
このＣトレンチを設定した畑の西側を南北に走る里道が調査区の北側で西へ屈曲することから、北面回廊の存在が予想された。そのため、調査区の北側にある柿の木に影響を及ぼさない部分で幅１mのトレンチを南北方向に13m設定した（Ｃ-３トレンチ）。このトレンチは南側で現地表面から約0.2m、北側で約0.3mで地山が検出された。遺構はピット２基と溝を検出した。

ピットはＰ-06が直径約0.9m、深さ約0.1mで、底に直径約0.2m、深さ約0.05mの穴が南北に２ヶ所にある。Ｐ-07は南北約0.6m、東西0.2m以上、深さ約0.1mで方形を呈すると考えられる。

溝は北端で検出した。東西方向の溝で２段になっており、１段目の溝の底から同じく東西方向に２条の溝が掘られている。溝としての役割をもっていたかどうか不明なため、遺構としてはＳＸ-01とした。１段目はまず南北1.2m以上



第６図　Ｃ-３トレンチ平面図・西壁断面図



第７図　Ａトレンチ出土軒瓦

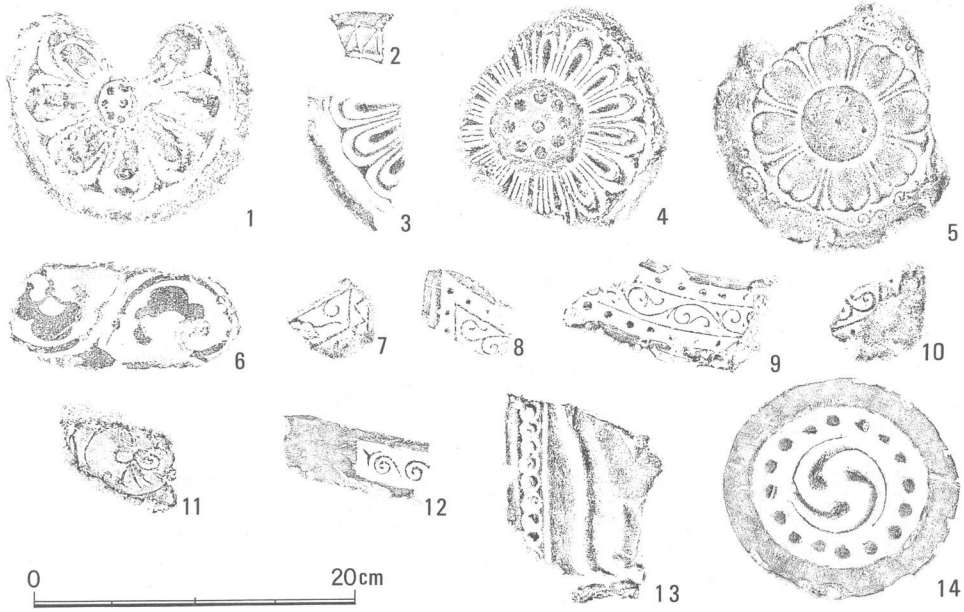
にわたって深さ約0.15m掘られ、２段目はその面から幅約0.25m～0.35m、深さ約0.2mと幅0.2m以上、深さ約0.1mの溝２条が掘られている。この１段目から掘られた２段目の溝の間隔は約0.2m、両者の中央部分の高さは約0.07mである。この２段目の溝の上面には瓦が堆積しており、単弁12弁蓮華紋軒丸瓦（第８図３）が１点出土した。瓦の出土状況は軒から焼け落ちた状況を呈していた。しかし、すぐ北側には隣地のブロック塀があるため、これ以上北へは掘削できなかった。１段目の溝の南側にあるＰ-06（溝の南端から中心までの距離は約2.6m）、またはＰ-07（同約1.2m）が現存する基壇を囲む塀の柱穴とすれば、この遺構は北側の雨落ちとも考えられるが、これに対応する遺構が南側にないことから遺構の性格を断定することはできない。ただ、北側で同じような遺構が検出されれば現存する基壇を囲む北面回廊、または、北側の塀の南側雨落ちと考えられるだろう。今後の調査を待ちたい。

２　おもな出土遺物

（１）Ａトレンチ（第７図）

１・２は坂田寺式軒丸瓦で坂田寺６型式Ａ種（以下、坂田寺６Ａと略す）と同笵である。表土直下で出土した。北廃寺から出土したものに比べると丸瓦の接合位置が高く、丸瓦の先端がほぼ瓦当の周縁にくる。また、瓦当厚も薄く、瓦当厚は１が周縁部で約2.0cm、中房付近で1.3cm、２は瓦当厚が周縁部で2.0cm～2.5cm、中房付近では1.0cm～1.3cmである。さらに、北廃寺出土のものでは蓮子から中房を囲む圏線にのびる笵傷が明瞭にみられるが、これらにはほとんどみられない（図版６）。周縁はヘラケズリ、瓦当裏面はナデ調整する。なお、１は焼成不良のため磨滅している。

３～５は中房に１＋８の蓮子を配す単弁16弁蓮華紋軒丸瓦である。蓮弁は細長くやや肥厚する。



第８図　Ｃトレンチ出土軒瓦

３は表土中から、４はＳＫ-04、５はＳＤ-02から出土した。外縁に線鋸歯紋（一部は面違鋸歯紋）をめぐらせる。周縁はヘラケズリにより調整し、瓦当裏面の下端はヘラケズリにより面取りを施す。

６は北廃寺から出土しているものと同笵と考えられる、中房に１＋７＋12の蓮子を配す複弁８弁蓮華紋軒丸瓦である。外縁には面違鋸歯紋をめぐらせる。蓮弁は肥厚せず平坦である。瓦当裏面はナデ調整を施す。

７は外縁に唐草紋をめぐらす単弁８弁蓮華紋軒丸瓦である。般若院境内から出土しているものと同笵と考えられる。6717Ｂの軒平瓦と組むと考えられる。

８はＳＫ-04から出土した。蓮華紋軒丸瓦と考えられる中房の一部である。蓮子が小さく、これまで尼寺廃寺から出土した瓦から考えると、６と同じ中房に１＋７＋12の蓮子を配す複弁８弁蓮華紋軒丸瓦の可能性が高い。

９～15は左から右に流れる偏行唐草紋軒平瓦で、上外区に珠紋、脇外区と下外区に線鋸歯紋をめぐらせる。直線顎で平瓦の凸面側に粘土を足して瓦当部をつくる。瓦当の凹面側は施紋に際してふくらんだ部分をヘラで一部削る。

16は右巻きの巴紋で、おもに第１層から数点出土している。

（２）Ｃトレンチ（第８図）

１は第７図１、２と同じ坂田寺式軒丸瓦で坂田寺６Ａと同笵である。焼成不良のため一部磨滅している。これも丸瓦の接合位置は高く、丸瓦の先端がほぼ瓦当の周縁にくる。また、接合粘土も少ない。瓦当厚は周縁部で2.5㎝、中房付近では1.2㎝である。拡張区のＳＫ-05から出土した。

２は外縁の破片で面違鋸歯紋が残る。瓦当裏面に溝を設けて丸瓦を接合する。これまで尼寺廃寺から出土した瓦から、第７図６と同じ中房に１＋７＋12の蓮子を配す複弁８弁蓮華紋軒丸瓦と

考えられる。これも拡張区のＳＫ-05から出土した。

３は単弁12弁蓮華紋軒丸瓦である。周縁は指頭によるナデ調整を施しておりややくぼんでいる。瓦当裏面はヘラケズリ調整を施し、下端はヘラケズリにより幅約２cmほど面取りを施す。Ｃ-３トレンチ北端で検出したＳＸ-01から出土した。

４は単弁16弁蓮華紋軒丸瓦で、拡張区のＳＫ-05から出土した。周縁はヘラケズリで調整し、瓦当裏面は縦方向の指ナデ調整、そして、下端は幅１cm弱の面取りを施す。

５は第７図７と同じ外縁に唐草紋をめぐらす単弁８弁蓮華紋軒丸瓦である。中房の蓮子は１＋８で、瓦当厚は周縁部で約4.0cmを測る。幅2.8cmもある厚手の丸瓦を接合している。周縁はヘラケズリ、瓦当裏面はナデ調整を施す。これも拡張区のＳＫ-05から出土した。

６は拡張区のＳＫ-01から出土した斑鳩寺213Ｂの軒平瓦である。瓦当厚は約6.8cmで５葉のパルメットとパルメットの中央下部から右下の方向、そして、右、上を通って左へいく蔓を１つの単位にした紋様のスタンプが上下交互に押されている。笵傷はあまりみられない。凸面は丁寧なナデで調整されており、凹面は瓦当から約1.5cmまで布目が残る。顎は直線顎で、胎土には白色の砂礫を多く含み、最大で0.9cmを測る。色調は瓦当および凸面と断面の一部がセピア色がかった灰色、凹面は淡青灰色を呈す。

７は第６図９～15と同じ左から右に流れる偏行唐草紋軒平瓦である。平瓦の凸面側に約0.5cm、瓦当部に約1.0cmの粘土を足して瓦当部をつくる。直線顎で側縁は３面にカットしている。瓦当の凹面側は施紋に際してふくらんだ部分をヘラで一部削る。

８～10は6717Ｂに分類される均整唐草紋軒平瓦である。10は黒色を呈しており火を受けたと思われる。８・９は灰白色を呈し紋様もシャープである。９は凹凸面ともに丁寧なナデで調整されている。８はＳＫ-05、９はＳＫ-04、10はＳＥ-02から出土した。その他、Ｃ-２トレンチの表土直下の整地土から細片が１点出土している。

11は均整唐草紋軒平瓦で、繊細な線で紋様が表現されている。第３次調査において完形品が出土しており（香芝市教育委員会1994b）、加守廃寺南遺跡でも同笵のものが出土している（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編1981）。瓦当の表面に直径0.9cmの砂礫がみられるなど、胎土に多くの砂礫を含んでいる。顎は曲線顎Ⅱで凸面は顎の付近まで縄叩きを残す。瓦当の凹面側は施紋に際してふくらんだ部分をヘラで削る。ＳＫ-04から出土した。

12は近世と考えられる均整唐草紋軒平瓦である。ＳＫ-02から出土した。

13は南都七大寺式の鬼瓦で、これもＳＫ-02から出土した。厚さは3.7cm～5.0cmを測る。これまで南廃寺では般若院境内で１点出土しているが、これとほぼ同じ部分の破片である。北廃寺でも塔跡の西側で１点出土している。なお、般若院境内出土のものは厚さが4.4cm～5.3cmを測り、今回出土したものより厚くつくられている。

14は近世と考えられる左巻きの巴紋軒丸瓦で、巴頭部は半球形を呈する。ＳＫ-03から出土した。その他、巴紋軒丸瓦はＳＫ-01やＳＫ-02でも出土しており、巴紋も右巻きと左巻きの両方がある。

なお、ＡトレンチやＣトレンチでは近世の陶磁器片や陶器片も多数出土している。また、ＣトレンチのＳＫ-01では木片や下駄も出土している。しかし、今回は寺院跡の範囲確認調査ということから瓦のみの報告とした。

Ⅳ　まとめ

（1）第17次調査からみた南廃寺の概要

今回の調査で伽藍に関係する遺構は検出できなかった。もっとも期待された現存する基壇の東側で設定したトレンチ（Cトレンチ）で遺構を検出した面は、基壇上面から約2.5m低い位置にあり、もし回廊等の遺構がかつて存在したとしても、すでに削平されたと考えられる。実際、C-1トレンチで検出したP-01、P-02の掘り方が深さ約0.15m～0.2mと浅かったことからも明らかである。しかし、C-1トレンチ東側で検出した近世の大規模な土坑（SK-02）によって東面回廊等の遺構が破壊されたとしても、その南の延長線上で設定したBトレンチで遺構が検出されなかったことを重視すれば、南廃寺は回廊ではなく塀などの施設で囲まれた寺院であったことも考えられる。さらに、今回出土した瓦の量は後世の削平を受けたとしても少なすぎることが回廊の存在を疑問視させる。今後、C-3トレンチ北端で検出した瓦が上面に堆積していた溝（SX-01）に対応する遺構が、北廃寺の回廊幅（約5.9m）に近い距離で、その北側から検出されたとすれば回廊の存在も再考する必要があろう。逆に、回廊幅より短い距離で対応する遺構が検出されたとすれば、塀などの施設を考えなければならないだろう。いずれにせよ、今後の調査が待たれるところである。ただし、C-1トレンチで検出したP-01、P-02の柱間が高麗尺の12尺に相当し、やや柱間は広いが現存する基壇を囲んでいた塀等の施設の柱穴である可能性は捨て切れない。

なお、南廃寺では現存する基壇のほか、瓦の出土状況から般若院の現本堂の位置に堂宇があったと推測され、この２つを四天王寺式や法隆寺式などの伽藍配置にあてはめて考えようとすると、方位などの問題等でかなり無理がある。しかし、飛鳥時代から奈良時代にわたる軒瓦等が大量に出土していることから、何らかの堂宇があったことは疑いない。

次に、創建時期について、今回の調査では飛鳥時代から平安時代までと近世の瓦が出土しており、中世の瓦はほとんど出土していない。また、北廃寺の創建瓦と考えられる坂田寺６Ａと同笵の坂田寺式軒丸瓦については、北廃寺から出土したものと今回の調査で南廃寺から出土したものを比較すると、南廃寺の方が笵傷の進行等から明らかに北廃寺に先行し、坂田寺出土のものとほぼ同じである。このことから、南廃寺の方が先に造営され、後に北廃寺が造営されたことは確実である。しかし、南廃寺では現在ある般若院境内から奈良時代中頃の軒瓦が大量に出土していることから、北廃寺造営後も新たな堂宇の造営、あるいは、既存の堂宇の葺き替えが行われている。そして、今回の調査で南廃寺から出土した瓦で明らかに中世と考えられる瓦が出土しなかったことから、中世以降近世まで新たな堂宇の造営が行われなかったと考えられる。

（2）南廃寺と北廃寺の関係、寺院名

このことについては２つの可能性が考えられる。

まず、１つは南廃寺を造営した一族が滅び、その後に進出した一族が川を隔てた北側の地を新たに整地し、回廊や築地に囲まれた本格的な寺院を造営して寺の中心を南から北へ移し、南は生活の空間としたと考えられる。

もう１つはこの地に進出した一族がまず南に堂宇を造営し、その後、新たに本格的な寺院として北廃寺を造営した。そして、奈良時代中頃、南にあった既存の堂宇の葺き替えを行ったか、北に新たな堂宇を造営する空間がなかったため南に堂宇を造営したことが考えられる。もし、南に新たな堂宇の造営を行ったとすれば、南は回廊に囲まれた伽藍ではなかったことから、容易に造

営できたと考えられる。

上の２つの可能性について、いずれにしても南廃寺が堂宇のみで回廊に囲まれた伽藍配置の寺院でなかったことから、川を隔てた北側の地において西側からのびる丘陵の先端を削るなど大規模な整地を行って回廊や築地に囲まれた本格的な寺院を造営した。そして、寺院の中心を南から北に移し、南は生活を中心とした空間となったことが考えられる。このことについては、これまで南廃寺の伽藍推定地の東側から南東部分における調査で多数の掘立柱建物跡や井戸、そして、遺物として大量の土器類が出土していることに対し、北廃寺の伽藍やその周辺の調査ではほとんど土器類は出土していない。唯一、北と南の中央の谷部分で検出した川跡の北側で井戸１基と土器類が少量出土したのみであることからも、北は寺院として、南は生活の空間として機能していたと推測できるのではないだろうか。

以上のことから、寺院名についても当初あった南の寺院名がそのまま北にも受け継がれたと考えられ、北と南でそれぞれの寺院名を考える必要はないのではなかろうか。したがって、これまで考えてきたように、飛鳥池遺跡で出土した木簡（奈良国立文化財研究所1998）などの資料から法号は「般若寺」（木簡では「波若寺」）、そして、地名を冠した「片岡寺」、また、尼寺であったことから般若尼寺、片岡尼寺ともよばれていたと考えられる。

また、南廃寺の範囲内に今も般若院があることから、北廃寺が廃絶してからも南廃寺は存続している。そして、北廃寺の廃絶時期についてはこれまで平安時代前半と考えてきたが、その後の遺物整理で塔跡周辺から中世の瓦が少なからず出土していることがわかってきた。このことから、回廊に囲まれた伽藍、あるいは、調査で確認した東向きの法隆寺式の伽藍配置がそのまま存続していたかどうかは不明であるが、塔基壇の礎石周辺で18世紀前半の陶磁器が大量に出土していることを重視すれば、その頃まで塔基壇を利用した何らかの堂宇が存在していたと考えられる。

このことを推測させる資料として、北廃寺のすぐ西側丘陵斜面に香塔寺があり、その境内に僧聖阿の墓がある。聖阿は1840年に没したとされる浄土宗の僧侶で、墓は塔に使われていたと考えられる石製露盤を台座にして塔跡の側柱と考えられる礎石を墓石としてのせている。もし塔が早い時期、たとえば当初考えていた平安時代前半頃に焼失したとすれば、おそらく聖阿が没したとされる1840年までにこの露盤が散逸していた可能性が高いであろう。しかし、露盤が墓の台座に使われていることから、その当時この付近に存在していたと考えられ、塔がある程度長く建っていたと考えた方が理解しやすいのではないだろうか。文化10年（1810）に記された「香塔寺略縁起」には、松永久秀が信貴山城にあったとき（1573年～1577年）、諸所の寺院を破却したが香塔寺一宇だけが残って法灯を受け継ぎ、塔跡などは礎石のみ田畑の中に散在しているとある（王寺町史編集委員会2000）。このことから、当時北廃寺にどれだけの堂宇が残っていたかは不明であるが、この時の焼き打ちでほとんど焼失した可能性が考えられる。そして焼失後、塔基壇とその礎石を利用して何らかの堂宇が建てられ、最終的にこの基壇から出土した陶磁器の年代、つまり、18世紀前半頃に廃絶したのではないだろうか。

以上のこと、そして今回の調査で南からは平安時代までの瓦と近世の瓦しか出土しなかったことについて次のことが考えられるのではないだろうか。まず、南に何らかの堂宇が造営され、その後、７世紀後半に新たに北の地を整地して北廃寺が造営され寺院の中心が南から北へ移り、平安時代頃までは北廃寺とともに南廃寺も瓦の葺き替え等が行われていた。しかしその後、完全に

北廃寺を中心に瓦の差し替え等が行われ、そして、北廃寺が廃絶後、まだ南に堂宇が残っていたことから瓦の葺き替え等の修理が行われ、現在にいたっているのではないだろうか。このことについては、今後、般若院境内を調査する機会があれば解明されるであろう。

（3）斑鳩寺213Bの軒平瓦について

この瓦については出土当時、大きく3つの問題があった。まず1つは、18世紀前半の土坑から出土したことから、本当にこの瓦が当初から尼寺廃寺に存在していたかである。いずれかの時代に本来尼寺廃寺にはなかった瓦が斑鳩から持ち込まれたのではないかという疑問である。極端ではあるが、瓦の収集家がいた可能性も考えられた。しかし、このことについては、今後の調査で寺院の遺構に伴って出土すれば解決されるであろう。

次に、この瓦がどこで製作されたかである。いいかえれば、忍冬唐草紋を彫ったスタンプの笵型が移動したかどうかである。というのも、後にこの笵型がすべて下向きに押されて吉備池廃寺の創建瓦として使われている（奈良国立文化財研究所編1997）ことから、もし、今回出土した瓦がこの地で製作されたものであれば、笵型が斑鳩寺から尼寺廃寺、そして、吉備池廃寺へ移動したことになるからである。しかし、このことについては、今回出土した瓦が製作技法や胎土が斑鳩寺出土のものと同じであったことから、笵型が移動したのではなく瓦のみ斑鳩寺から運ばれてきたことが判明し、笵型は斑鳩寺から吉備池廃寺への移動のみということになった。

あと1つは尼寺廃寺を造営した一族の問題である。斑鳩寺は言うまでもなく聖徳太子とその一族である上宮王家が造営した寺院である。これまで尼寺廃寺においては斑鳩寺、および法隆寺西院伽藍の創建瓦はまったく出土していなかった。したがって、上宮王家が尼寺廃寺の創建にかかわってないと考えてきた。しかし、今回の調査で出土したことから上宮王家が尼寺廃寺（南廃寺）を造営した可能性が指摘された。しかも、斑鳩寺213Bは斑鳩寺から出土した飛鳥時代の瓦を3期に分類した中期（622年～643年）とされていることや（花谷2000）、今回の調査で出土した坂田寺6Aと同笵の坂田寺式軒丸瓦の笵傷の進行状況などから、南廃寺が北廃寺より先に造営されたことが確実となり、南廃寺が7世紀第3四半期、つまり上宮王家滅亡前に造営された可能性が高くなったからである。しかし、今回出土したのは1点のみであり、しかも、寺院の遺構に伴うのでなく江戸時代の土坑からであることから、この瓦をもって上宮王家が南廃寺を造営したとするには根拠不足であり、確実に遺構に伴う良好な資料の増加を待たなければならないであろう。しかし、南廃寺が上宮王家によって創建されたとしても、上宮王家が643年に滅亡した後に他の一族がこの地に進出し、上宮王家が掌握していた各種技術者集団をとりこんで北廃寺を造営したことは十分考えられ、北廃寺の塔心礎柱座が斑鳩寺と同じ型式になったことは理解しやすい。これも今後の課題である。

最後に、今回の調査によって南廃寺が北廃寺より先に造営されたことが明らかになったことは大きな成果である。これまで里道などから見た地割りで想定される寺域が北廃寺より大きいこと、現在も般若院が残っていることなどから、南廃寺が中心と考えてきた。しかし、回廊など伽藍に関係する遺構は検出されず、また、これまでの調査で北廃寺から出土した瓦から北廃寺も長く存続した可能性が高くなった。今後、南廃寺が回廊を伴う伽藍として整備されていたかどうか、そして、創建時の遺構、および創建瓦の解明が最大の課題となり、これらが解明されれば南と北の関係、さらには南廃寺の造営年代や造営した一族も見えてくるであろう。

参 考 文 献

泉森　皎　1984『竜田御坊山古墳付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊　奈良県教育委員会

太田三喜　1994「天理参考館所蔵のパルメット唐草文軒平瓦」『天理参考館報』第７号

太田三喜　1997「尼寺廃寺の瓦」『天理参考館報』第10号

大脇　潔　1999「尼寺廃寺考」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論集』

王寺町史編集委員会編　2000「香塔寺略縁起」『新訂王寺町史資料編』王寺町

香芝市教育委員会編　1992『尼寺廃寺北遺跡発掘調査概報』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　1993『尼寺廃寺南遺跡発掘調査概報』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　1994ａ『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報１』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　1994ｂ『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報２』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　1995ａ『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報３』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　1995ｂ『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報４』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　1996『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報５』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　1997『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報７』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　1998『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報９』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　2000『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報12』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　2001ａ『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報14』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　2001ｂ『香芝市遺跡地図（平成13年度改訂版）』香芝市教育委員会

香芝町史調査委員会編　1976『香芝町史』香芝町役場

千賀　久　1983「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県教育委員会

塚口義信　1991「歩きながら考えよう－平野塚穴山古墳の被葬者について－」『堺女子短期大学紀要』第26冊

奈良国立文化財研究所編　1997『奈良国立文化財研究所年報1997-Ⅱ』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所編　1998『奈良国立文化財研究所年報1998-Ⅱ』奈良国立文化財研究所

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編　1981『葛城の古墳と古代寺院』

奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編　1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会

花谷　浩　2000「斑鳩寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ』古代瓦研究会

毛利光俊彦・佐川正敏・花谷　浩　1992『法隆寺の至宝瓦』（『昭和資財帳』15）小学館

保井芳太郎　1932『大和上代寺院志』大和史学会

平野１号墳（平野車塚古墳）

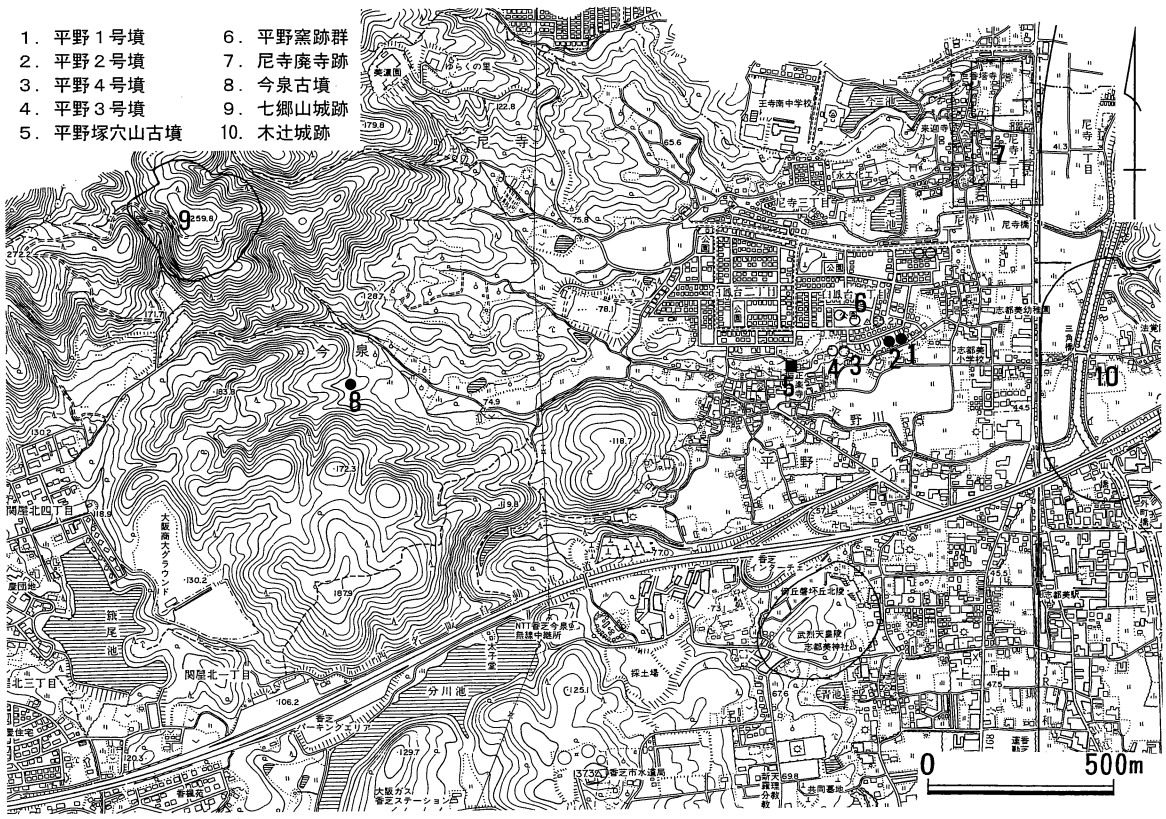
Ⅰ　位置と環境

平野１号墳は、奈良県香芝市北部の７世紀代を中心とする平野古墳群に位置する。古墳群は、北西から南東方向へ派生する標高約60m前後の丘陵南東斜面に立地しており、東西約330mの範囲にわたって約６基の古墳が分布していたことが推定されている（泉森1976, 1984）。

古墳群の東端に平野１号墳が位置しており、西方約20mに平野２号墳が築造されている。また、古墳群の中央部に平野３・４号墳（現在は消滅）があり、古墳群の西端に二上山産の凝灰岩の切石で構築した横口式石槨の平野塚穴山古墳（国指定史跡）が築造されている。

これらの古墳は、地元に残された江戸時代の古絵図から平野３・４号墳は武烈天皇陵として、平野塚穴山古墳は顕宗天皇陵として治定されており、平野１・２号墳は御廟所として天皇陵に準じる取り扱いを受けていたことがうかがえる（泉森1984）。

周辺の遺跡としては、古墳の北西約100mには須恵器や瓦を焼成した地下式の有段登窯を有する平野窯跡群が所在するのをはじめ（千賀1983）、北東約200mには尼寺廃寺跡等の６世紀後半から７世紀代を中心とする遺跡が集中している。



第９図　平野古墳群及び平野１号墳周辺の遺跡分布図（Ｓ＝１／20,000　上が北）

Ⅱ　調査の概要

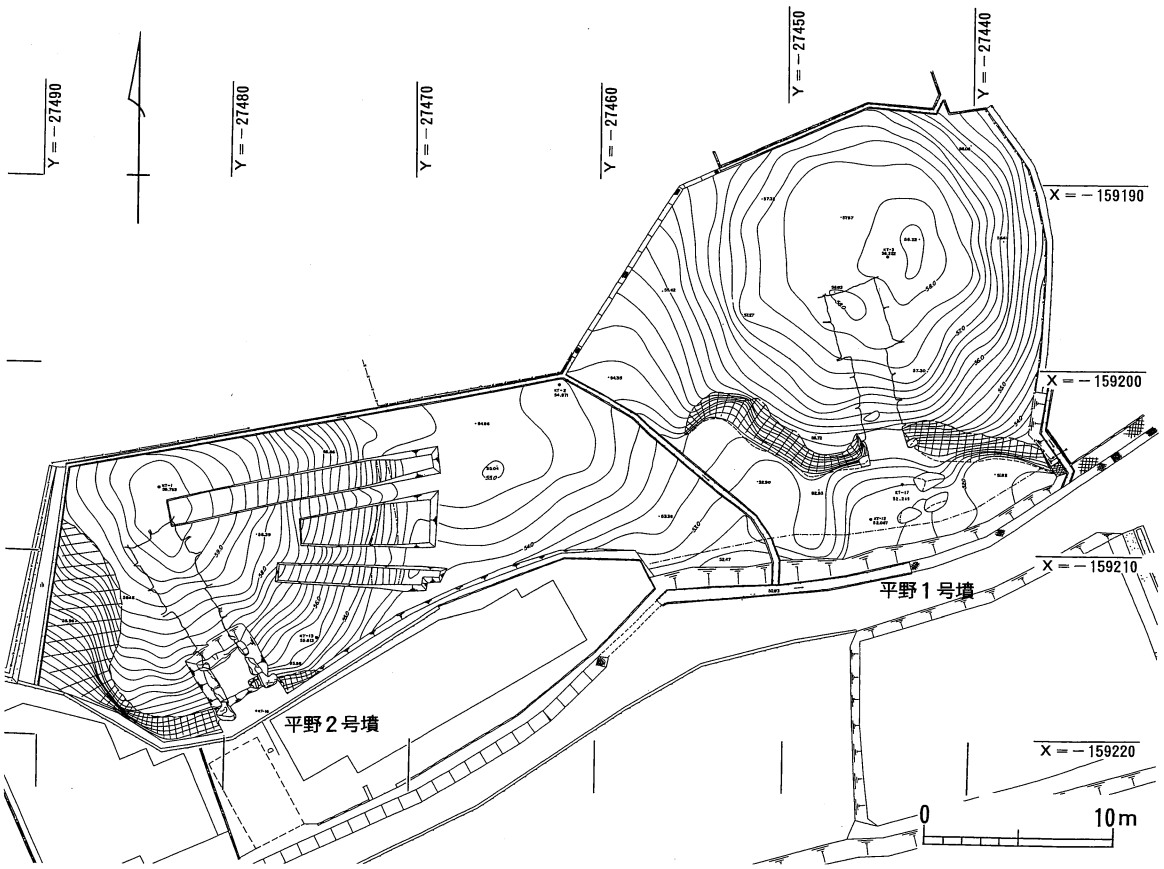
（1）調査の経過

香芝市教育委員会では、平成11年度から３年事業計画で平野１号墳と平野２号墳の範囲確認調査を実施している。平成11年度は、古墳の現況の範囲や形状を把握するため、平野１・２号墳の墳丘部の地形測量調査を始めて実施した結果、平野１号墳は、従来から推測されてきたような方墳ではなく、円墳である可能性が強いことが明らかとなった。

また、平野２号墳については、第１次調査の結果、復元推定直径約26m前後、高さ約6.5mの円墳で、版築技法により墳丘が構築されていることや横穴式石室羨道部の側石の一部を検出するに至り、主体部は横穴式石室であることを確認した（香芝市教育委員会2000）。

平成12年度は平野２号墳の横穴式石室内部の発掘調査を実施し、これまで全く知られていなかった未知の横穴式石室を１基検出した。石室内部は中世・近世頃に徹底的に盗掘を受けており、装飾品等の顕著な副葬品は検出されなかったが、玄室床面中央部に土で構築した棺台の基礎を設け、床面全面に二上山産の凝灰岩の切石を敷きつめた特殊な構造をもつ横穴式石室であることを確認した（香芝市教育委員会2001）。

平成13年度は、平野１号墳の横穴式石室の平面図や側面図等の詳細な実測図面を作成した。



第10図　平野１・２号墳地形測量図及び横穴式石室位置図（Ｓ＝１／200）

（2）横穴式石室

平野１号墳は、平野古墳群の中でも最も東側の丘陵の東端部に構築されている。古墳の北側と東側は、既に宅地造成の際に削平されており、墳丘南側の羨道部付近や墳丘の西側の大半も土砂採集によって削平されて墳丘は著しく崩壊している。これまでは、一辺20m、高さ3.5mの方墳と考えられてきたが、平成11年度に作成した地形測量調査からは方墳ではなく、平野２号墳と同様に直径24～26m前後の円墳である可能性が強くなった（香芝市教育委員会2000）。

主体部は、南方に開口した横穴式石室で、方位は西へ約５度振っている。横穴式石室は、墳丘の中心からやや南側に築かれているようであり、全長（残存長）約9.2mを測る。

玄室は、幅2.8m、長さ3.5mで、現況の床面からの高さは約２mを測る。玄室は、主として比較的面の整った花崗岩の巨石を横位に使って２段積で構築しており、２石目で内側へ緩やかに内傾させて持ち送りを行っている。天井には２枚の巨石を架構しており、左右両側石の隙間に小石を詰めている。

羨道部は、長さ5.7m、幅1.8mで、現状の堆積土からの高さは1.5mを測る。羨道も比較的面の整った花崗岩の巨石４枚を縦位に配し、天井には２枚の巨石を架構している。羨道左側石の中央部に不揃いの箇所があるせいか、石室の平面観は玄室と羨道の中軸線が合致せず、玄室を古墳の中心と見ると、玄室に対して羨道がやや西偏したアンバランスな様相を呈している。羨道側石や天井石は、南方にさらに一石～二石程度あったものと推定されるが、後世の石材採取により遺存していなかった。

奥壁は、２段積みで幅１m、高さ1.4mの巨石１石を基底石として据え、その上に高さ1.4m、幅1.3m前後の巨石２枚を左右に配置してそれぞれ持ち送りを行っており、上下段の石の隙間には花崗岩の粉末を詰めている。

平野１号墳と隣接する平野２号墳の石室と比較すると、平野２号墳は、一部を除き基本的に玄室・羨道とも１枚の巨石を縦位に使ってほぼ垂直に立てて石室を構築しているが、平野１号墳の玄室は、石材を横位に使って２段積で構築されており、持ち送りの傾斜角度が平野２号墳に比して強く、また、袖の幅が広いことなど、とくに玄室の石積技法や石室形態等において明らかに時期的な差異が認められる。

しかし、表１に示すように、両古墳とも全体的に極めてよく似た石室規模であり、ほぼ同時期・同規模の大和の主要な横穴式石室を持つ古墳と比較すると、とくに玄室は墳丘内に玄室を大きく築くための充分な空間があるにも関わらず、玄室の幅に比して玄室の長さの比率が短く、比較的正方形に近い平面規格を持つことが特徴的である。

また、両古墳とも丘陵の末端部の斜面に立地するにも関わらず、石室の床面をはじめ羨道側石上面や天井石下面等の各部位がほぼ同じ標高を指向していることから、古墳の構築面をある程度並行になるように意識して築造されている可能性が強い。

泉森皎氏は平野１・２号墳を双墓と提唱されているが（泉森1999）、これらの観点から見ても両古墳は極めて綿密な計画性に基づいて設計・築造された古墳と考えられる。

表１　平野１・２号墳の横穴式石室規模の比較　※単位はm。（　）は現況値・残存値を表す。

古墳名	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	袖幅
平野１号墳	(9.2)	(3.5)	(2.8)	(2.0)	(5.7)	1.9	(1.5)	0.5
平野２号墳	(10.6)	3.8	2.5	2.2	6.8	2.0	1.6	0.25

平野１号墳の正確な築造時期は不明であるが、これまでの見解のとおり、石室の石積技法や石室形態等から西に隣接する平野２号墳よりもやや古い７世紀前半の築造時期が考えら、平野古墳群の中でも最初か、あるいは、初期に築造された古墳と考えられる。

Ⅲ　まとめ

横穴式石室の石積技法や石室形態等から平野１号墳が平野２号墳よりも先に築造された古墳と考えられるが、今回の詳細な測量調査で両古墳の石室は、極めてよく似た規模・規格をもつ古墳であることを認識するに至った。

平野２号墳は、玄室床面中央部に土で構築した棺台の基礎を設け、床面全面に二上山産の凝灰岩の切石を敷きつめた特殊な構造をもつ横穴式石室であり、棺は凝灰岩製の石棺ではなく、木棺等の有機質の棺であった。

平野１号墳も平野２号墳と同様の墓室構造・棺の埋葬形態を持つ古墳であるならば、改めて両古墳の計画性が証明されることであろう。

平野古墳群では、この平野１号墳と平野２号墳の他にも、現在は消滅して検討の余地はなくなってしまったが、古絵図には古墳群の中央部に築造された平野３号墳と平野４号墳の２基の古墳が並列する様が描かれている。

このように平野古墳群は、同等規模・形状の２基の古墳が近接・並列して築造されていることが特徴的であり、墓域としても計画的に選地し、築造されていた可能性がある。

現段階では、平野１号墳の墓室構造・棺の埋葬形態は全くの謎であり、今後将来の発掘調査に委ねたい。

参 考 文 献

泉森　皎　1976「古墳時代」『香芝町史』香芝町役場

泉森　皎　1984『竜田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊　奈良県教育委員会

泉森　皎　1999「六　平野塚穴山古墳と斑鳩文化」『近畿の古墳文化』学生社

千賀　久　1983「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』奈良県教育委員会

香芝市教育委員会編　1998「尼寺北廃寺（尼寺廃寺第14次調査）」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報９』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　2000「平野２号墳第１次調査」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報13』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　2001「平野２号墳第２次調査」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報14』香芝市教育委員会

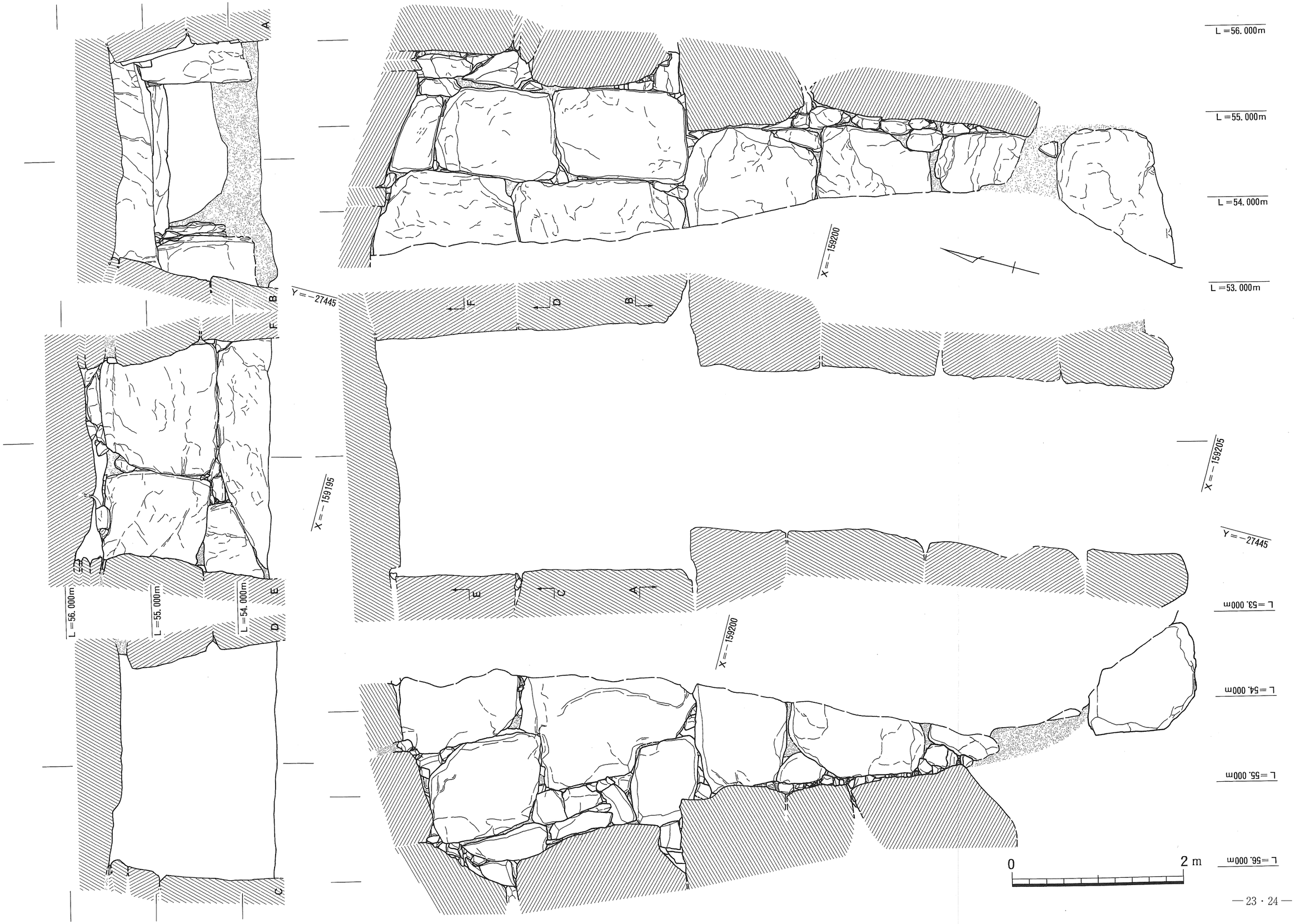


図11　平野１号墳横穴式石室実測図（S＝１／40）

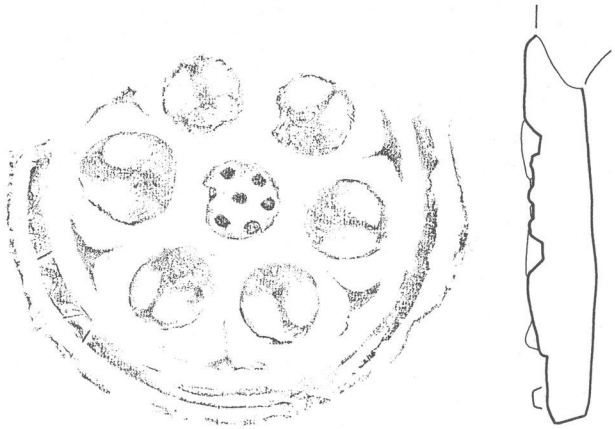
付　載

尼寺廃寺第15次調査出土の軒丸瓦

平成11年８月５日から平成12年２月23日まで、民間の開発事業に伴い尼寺廃寺南遺跡において発掘調査が実施された（第２図）。発掘面積は1,336㎡に及び、トレンチ全面で多くの遺構が検出され、膨大な遺物が出土した（香芝市教育委員会編2000）。そのうち、これまで尼寺廃寺における調査で出土した軒丸瓦の中で、もっとも古いと考えられる軒丸瓦が出土しているので紹介する。

この瓦は調査区の北東部の暗褐色土の包含層から出土しており遺構には伴っていない。単弁６弁蓮華紋軒丸瓦で直径は14.1cm、厚さは周縁下端で約1.0cmを測る。中房径は2.7cmで１＋６の蓮子を配す。蓮弁はやや肥厚し、中央から先の弁端部分は反転している。蓮弁長は2.8cm～3.3cm、幅2.5cm～3.0cmと不揃いである。間弁は楔形を呈し、蓮弁と同じで中房まで達しない。周縁はナデ調整、瓦当裏面は横方向のナデ調整を施す。色調は全体的に灰白色を呈し、瓦当や瓦当裏面の一部、および丸瓦の接合部は橙色を呈す。焼成は堅致である。

この瓦は一見、坂田寺５型式Ａ種（以下、坂田寺５Ａと略す）に類似している（奈良国立文化財研究所編1992）。坂田寺５Ａは中房の蓮子数が１＋７で、中房を囲む圏線があるのに対し、これは蓮子が１＋６で、中房を囲む圏線がないという違いはあるが、蓮弁や間弁、外縁などに類似する点が多い。おそらく、坂田寺５Ａを模倣したと考えられる。そして、坂田寺６Ａと同笵のいわゆる坂田寺式軒丸瓦も尼寺廃寺で採用されていることに関連して興味深い。



第12図　第15次調査出土軒丸瓦（Ｓ＝１／２）

最後に、坂田寺は７世紀を中心とした軒瓦が多数出土しており、造営や修造の画期ごとに大きく６期に区分され、坂田寺５Ａは２期（法隆寺若草伽藍と同時期）、同６Ａは３期（640年～650年頃）とされている（西川2001）。したがって、今回報告する軒丸瓦は斑鳩寺213Ｂとの関連で興味深い。今後の調査で今回報告する軒丸瓦や斑鳩寺213Ｂが寺院の遺構に伴って出土すれば、伽藍として整備されていなかったとしても、南廃寺の造営が確実に７世紀前半にさかのぼるであろう。

参考文献

香芝市教育委員会編　2000『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報12』香芝市教育委員会

奈良国立文化財研究所編　1992「坂田寺第７次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』

西川雄大　2001「飛鳥の坂田寺式軒丸瓦」『古代瓦研究会 2001年度検討会－坂田寺式単弁軒丸瓦の諸問題－発表要旨』奈良文化財研究所

写真図版

Aトレンチ
調査前
（北東から）

Aトレンチ
遺構検出状況
（北東から）

Aトレンチ
全景
（東から）

Aトレンチ
SD-02
（南から）

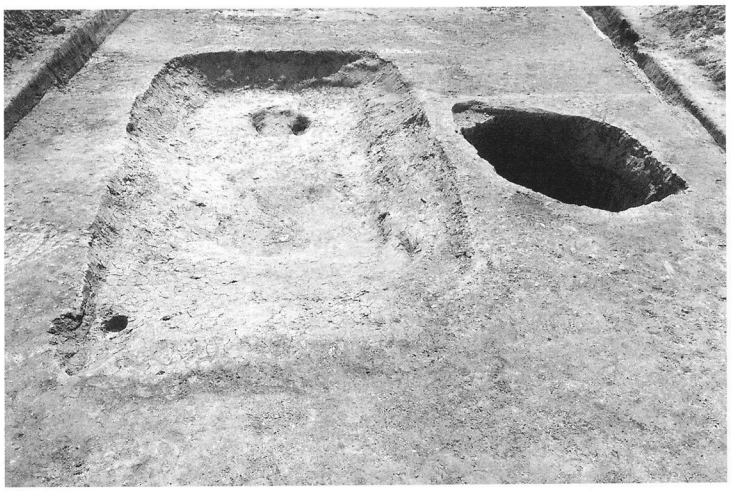
Bトレンチ
調査前
（北西から）

Bトレンチ
全景
（北西から）

Bトレンチ
ピット検出状況
（北から）

Cトレンチ
調査前
（南西から）

Cトレンチ
全景
（南西から）



Cトレンチ拡張区
SK-01，SE-01
（北から）

Cトレンチ拡張区
SK-01，SE-01・02
（東から）

C-1トレンチ
SK-02
（北東から）

図版5　尼寺廃寺第17次調査・Aトレンチ出土軒瓦

Cトレンチ拡張区
ＳＫ-05
(西から)

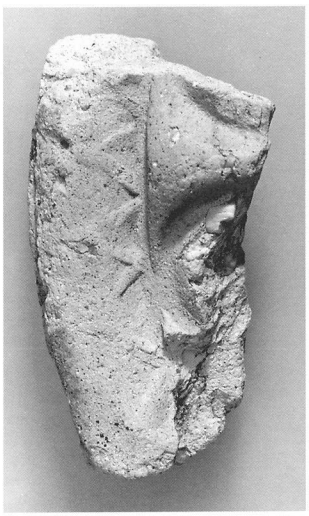
C-3トレンチ
ＳＸ-01
(東から)

左：第7図1
右：第7図2

図版6　坂田寺式軒丸瓦・Aトレンチ出土軒瓦

坂田寺式軒丸瓦の笵傷進行状況（中房）
左：南廃寺　第17次調査出土（第７図２）
左下：北廃寺　第４次調査出土
右下：北廃寺　第10次調査出土

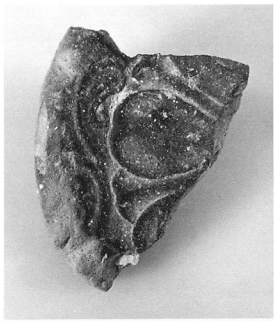
第７図３



第７図４

第７図５

第7図6


第7図7

第7図9

第7図13

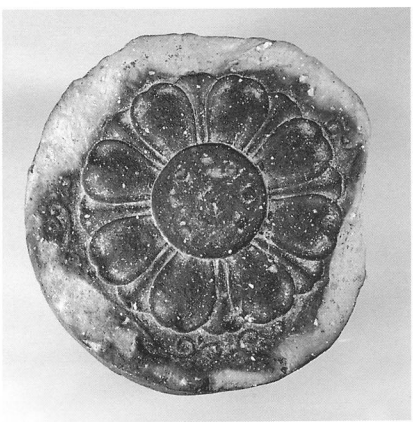
第7図10

第8図1

第7図14

第8図3

第8図4


第8図5

図版8　Cトレンチ出土軒瓦

第8図6（斑鳩寺213B）

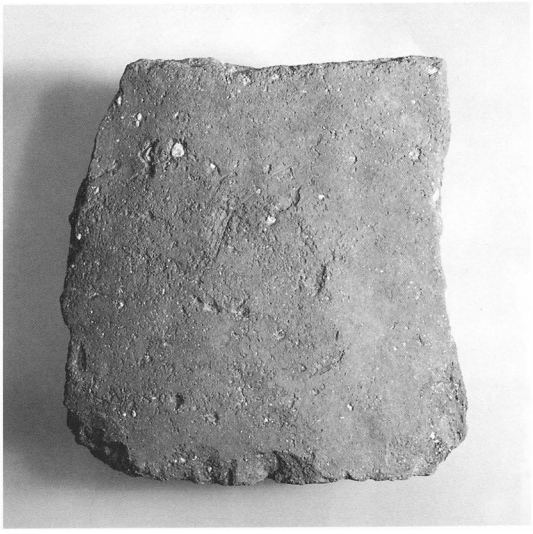
同拡大

同拡大

斑鳩寺213Bの側面

同側面

同凹面



同凸面

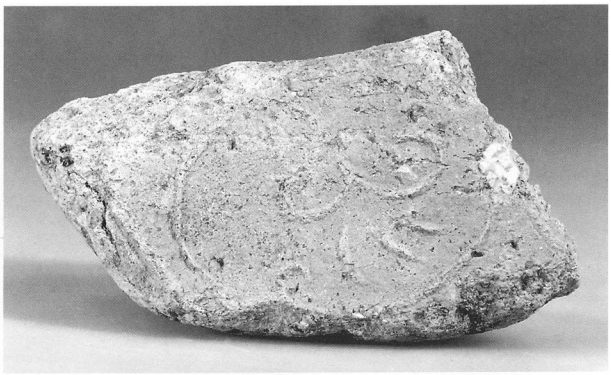
第８図７

第８図８

第８図13

第８図９

第８図14



第８図11

第15次調査出土軒丸瓦（第12図）

第８図12

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせいじゅうさんねんど かしばしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう　じゅうご
書　名	平成13年度香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 15
副書名	
巻　次	
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	15
編著者名	山下　隆次（尼寺廃寺第17次調査）、下大迫　幹洋（平野１号墳）
編集機関	香芝市二上山博物館
所在地	〒639-0243　奈良県香芝市藤山１丁目17番17号
発行年月日	西暦2002（平成14）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
にんじはいじみなみいせき 尼寺廃寺南遺跡	ならけん 奈良県 かしばし 香芝市 にんじちょうめ 尼寺２丁目 174-3、175-1 198-1、-2 265-1	292109	144	34度 34分 44秒	135度 42分 13秒	20010522 ～ 20011130	645㎡	範囲確認 調査
	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物		特　記　事　項		
	寺院	飛鳥時代 奈良時代 江戸時代	土坑、溝 井戸	瓦片、須恵器片、 土師器、陶磁器片等		今回の調査で伽藍に関係する遺構は検出されなかった。しかし、出土した瓦から、南廃寺の方が北廃寺より先に造営されたことが判明した。 また、尼寺廃寺で初めて斑鳩寺の創建瓦が出土した。		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ひらの　ごうふん 平野１号墳	ならけん 奈良県 かしばし 香芝市 ひらの 平野 ばんち 1043番地	292109	127	34度 33分 15秒	135度 42分 02秒	20010822 ～ 20011130		範囲確認 調査
	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物		特　記　事　項		
	古墳	古墳時代				横穴式石室の実測調査。		

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報　15
－平成13年度－
2002(平成14)年３月31日
編集　香芝市二上山博物館
〒639-0243 奈良県香芝市藤山１丁目17番17号
TEL. 0745-77-1700　FAX. 0745-77-1601
発行　香芝市教育委員会
〒639-0244 香芝市本町1397番地
印刷　堀内印刷株式会社
奈良県大和高田市春日町１丁目９－10
TEL. 0745-52-0557　FAX. 0745-23-2330